

指定校番号	28061	学級活動	児童会・生徒会活動	○	学校行事	別紙様式
-------	-------	------	-----------	---	------	------

平成 28 年度生徒指導集中対策指定校及び生徒指導実践指定校 「特別活動の取組事例」

学校名	尾道市立栗原北小学校	校長	本藤 展康	生徒指導主事	利田 政美
-----	------------	----	-------	--------	-------

取組事例名 『児童主体の縦割り活動による自己肯定感の醸成』

取組のねらい『キーワード：自己肯定感の醸成』

・本校の児童には、友人のちょっとした言動から暴力行為を生起させたり、人間関係を崩したりする傾向が見られる。また、集団になじめず、集団内で自己の能力を十分に発揮できていない児童も少なくない。その主要因として、自己に対する評価を肯定的に捉え切れていないといった自己肯定感の低さが挙げられる。そこで児童一人一人の自己肯定感を意図的、計画的に育てていくこととした。

取組の具体的内容『キーワード：児童主体の縦割り活動による自己肯定感の醸成』

【ねらい】

- ・ 上学年児童は下学年児童をリード、サポートし、上学年としての意識や自己肯定感を醸成する。
(主体性、有用感、達成感等の醸成による自己評価の向上)
- ・ 下学年児童は上学年児童からのサポートを受け、上学年をモデルとして良い言動を身につける。
(親和性、有用感、受容感等の醸成による自己評価の向上)

【内容】

- ・ 縦割り活動
 - ・ 1年生を迎える会、体力テスト、縦割り掃除、縦割り遊び等。
縦割り班16班がリーダー(6年生)の指示のもと、協力して活動を行う。
開始時の挨拶や仕事内容の確認、終了後のふり返りを徹底する。
班の頑張りを掲示するとともに、表彰する。
- ・ 異学年交流
 - ・ 遠足、合同授業、児童相互の授業参観、絵本の読み聞かせ、全員遊び等。
上学年が下学年をリード、サポートしながら、複数学年と一緒に活動をする。
相互評価を行い、その評価内容を見える化する。



児童の感想より

○私は縦割り活動のリーダーとなって、グループをまとめることができるか心配だった。1年生の子に、「ほうきの先が悪くならないように、優しくスーとはいってね。」と言うと、1年生の子が、「うん、わかった。ありがとう。」と言ってくれた。その子はとても上手に掃除をすることができるようになった。私は、他の学年と協力をして、毎日学校がきれいになることで、幸せを感じている。(6年児童)

○僕は同じ班の2年生の子にどう接してよいのかわからなかった。指示を出しても言うことを聞いてくれなかったの、いつもけんかになっていた。ある時、優しく声をかけて、側で掃除をして見せ



ると、2年生の子から、「ありがとう。僕、リーダーのことが好きだよ。」という言葉が返ってきた。相手の気持ちを考えて接すれば良かったんだと思った。(6年児童)

○僕は、6年生が低学年の子に優しく教えてあげたり、みんなが嫌がるような仕事を進んでしたりしている姿を見て、「6年生はすてきだな。かっこいいな。」と思う。僕も同じ班の6年生のような人になりたい。(5年児童)

○私は大縄跳びが苦手だ。入るのがとてもこわい。でも、いつも6年生の人が側に来て、手をつないでくれる。他の学年の人が声をかけてくれる。頑張ってみようかなと元気が出る。(1年児童)



取組の課題・創意工夫『キーワード：異学年によるかかわり・評価の見える化』

<創意工夫>

- ・児童会委員を中心とした上学年が、各班長に指示を出し主体的な活動を促すことにより、上学年児童の有用感と達成感の醸成が図れるようにした。
- ・活動後の各班でのふり返りにおいて肯定的な評価を意識させることにより、上学年児童に受容的態度、相手意識等の他者に対する肯定的な意識の醸成を図った。また、下学年児童に上学年児童からしっかりと受容されているといった実感を持たせるよう努めた。
- ・他学年の児童からの多角的な視点による評価を行い、評価内容を掲示する等、評価の見える化を図った。

<課題>

- ・担当教職員による指導と支援が、リーダーとなる児童の特性を十分に捉えきれていない場面があった。
- ・上学年児童によるサポートが、下学年児童に十分に理解されない場面があった。
- ・上学年児童に、望ましい声かけや関わり方等、コミュニケーションの方法を身につけさせる必要がある。

取組の成果（効果）『キーワード：児童の主体性と肯定的な自己意識の向上』

- ・活動を重ねるごとに、6年生に、自分達が活動を運営していくといった自覚と責任感が高まってきた。
- ・縦割り班の各リーダーが、低学年児童の理解度を意識した声かけや指示が出せるようになった。
- ・上学年児童は、下学年児童のよきモデルとなるよう意識して行動するようになった。
- ・下学年児童は、上学年児童に対する親和性を強めるとともに、受け止められている、大切に思われているといった実感を育むことができた。

自己肯定感をもつ児童の割合

6月	12月
87%	93%

共感的人間関係をもつ児童の割合

6月	12月
90%	92%

今後の展開『キーワード：異学年活動の充実』

- ・これまでの既存の縦割り活動の改善、充実を図るとともに、児童会集会や学校行事等における縦割り活動の場を増やし、より計画的、系統的な活動とする。
- ・校内における異学年活動や保育所、幼稚園、中学校等との交流活動にも取り組む。

他校へのアドバイス『キーワード：異学年活動の有効性』

- ・各校の児童や生徒の実態に応じた縦割り活動、異学年活動を日常の教育活動に取り入れることは、人間関係及び集団内における自己イメージの固定化した同学年では育むことが難しい主体性や有用感等の肯定的な自己意識を醸成することに有効である。